

(講演録) 紅樓夢の成立過程について

船越達志

船越達志と申します。本日は、このような機会を与えてくださり、感謝申し上げます。本日は清代の長篇白話小説『紅樓夢』(前八十回)の成立過程に関しまして、私が日ごろ考えておりますことを述べさせていただきますと存じます。

一

まず、前ふりといたしまして、『紅樓夢』の日本における翻訳の状況からご説明させていただき、そこから話を進めていきたいと思えます。『紅樓夢』そのものの成立年代は、はっきりとしたことはわかりませんが、概ね乾隆十九年〜乾隆二十七年ごろと考えられます。刊行は、その三十年ほど後の乾隆

五十六年です。日本にはその直後に伝わったようですが、最初の全訳は、大正十一年にかけて、幸田露伴・平岡龍城の共訳という形で「国訳漢文大成」の一つとして刊行されました。小説本体の誕生から百五十年ほど後のこととなります。その後、昭和に入ってから、岩波文庫(松枝茂夫訳)、平凡社(伊藤漱平訳)などを初めとして、各種の翻訳やダイジェスト版などが出版されました。しかし、大正十年の幸田露伴・平岡龍城訳が世に出る以前にも、部分訳という形で、『紅樓夢』翻訳の試みがなされておりました。『紅樓夢』は大変に長い小説ですので、まずこういった試みがなされましたのは自然なことだと思えます。これは、全訳が日本に出る以前の、「日本における初期の『紅樓夢』受容」の状況と言えるかと思いま

す。こういった中で、特に面白いように思いますのは、明治時代の文人の動向です。

明治二十五年六月、明治の文豪・島崎藤村は、『紅樓夢』第十二回の後半部分を翻訳し、「無名氏」の署名で「紅樓夢の一節―風月宝鑑の辞」と題する訳文を『女学雑誌』第三二一号（甲の巻）に発表しました（筑摩書房『藤村全集』第十六巻収録）。

この場面は、賈瑞という名の男が、人妻である王熙鳳に邪な欲望を抱き、彼女にさんざんに弄ばれ、思いを遂げられぬまま病死する一節です。（資料①）に梗概を掲げました。

（資料①） 賈瑞の一節（あらすじ）

賈家の家塾の教師を務める賈代儒の孫、賈瑞は、寧国邸において王熙鳳の妖艶な姿を見てすっかり魅せられてしまい、それとなく王熙鳳の気を引いてみる。勘の鋭い王熙鳳はすぐに賈瑞の魂胆を見抜くが、わざと王熙鳳も賈瑞に気があるかのような対応をみせる。実は王熙鳳は、賈瑞の言動に強い嫌悪感を覚えていたのであるが、一計を案じ、賈瑞を罠にはめてやろうとしていたのであった。

それと知らぬ賈瑞は、大喜びで王熙鳳と密会の約束をする。しかしその約束は王熙鳳にすっぱかされ会う事が出来ない。もう一度密会の約束をした賈瑞が暗室で王熙鳳を待っていると、やってきたのは、すでに王熙鳳の知らせを受けた賈家の若者たち（賈蕃と賈蓉）であった。賈瑞はその場でとりおさえられ、賈蕃と賈蓉の二人に、それぞれ銀五十両を支払う、という約束をさせられる。賈瑞はすっかり恥ずかしい思いをして、やっとの事で家に帰るが、この衝撃により病気になるってしまった。賈瑞の病気は一向に良くならないが、ある日、賈瑞は、跛足道士に「風月宝鑑」という名の鏡を与えられ、道士にその鏡の裏を見なければ必ず病気は良くなるが、決して正面を覗いてはいけない、と言われる。賈瑞が裏を覗くとそこには骸骨が映っていたが、正面を覗くと王熙鳳の幻影が笑顔で賈瑞を呼んでいる。賈瑞はその招きに引かれて鏡の中で王熙鳳と情事を結ぶ。このようなことを三、四回繰り返すうちに、賈瑞はついに死んでしまう。賈代儒が怒って鏡を焼き捨てようとすると、鏡は「誰が正面から覗けと言った。お前たちが勝手に仮を真とみなしたん

じゃないか。」と叫び泣く。あわてて跛足道士がやってきて、鏡を救って去って行く。

この場面における賈瑞の死に方は、尋常なものではありません。現実離れた怪談のような一節です。もしこの場面だけを讀んだのであれば、『紅樓夢』は『聊齋志異』のような怪談集と誤解されてしまうかもしれません。

*

島崎藤村によるこの一節の翻訳は、同時代の文人・北村透谷に強い影響を与え、日本を舞台とした『宿魂鏡』（『国民之友』第一七八号、明治二十六年一月）という小説が生まれました（注1）。

北村透谷は、明治時代の著名な文人、詩人、文芸評論家です。島崎藤村とは密接な交流がありました。著名な小説家・正宗白鳥は、この『宿魂鏡』を評して、北村透谷の作品中、最も傑出した作品であると指摘しています（注2）。

すでにこの小説を御覧になった方もおられるかと思いますが、ここで簡単にその内容を紹介させていただきます。『宿魂鏡』は、それほど長い小説ではありませんが、（上）（下）の

二つの部分に分かれております。（資料②）を御覧ください。

（資料②）北村透谷『宿魂鏡』（『国民之友』第一七八号、明治二十六年一月）あらずじ

・『宿魂鏡』上

山名芳三は奥州白河から東京へ学問をしに出てきた。大学まで進んだ折、某省の高官・戸沢男爵に見込まれ、彼の家に住み込み、政治学を実地に研究することになる。

山名芳三には元来、親が決めた許婚・阿梅がいたのだが、戸沢男爵の邸の中で、一つ屋根に暮らすうちに、戸沢男爵の娘・戸沢弓子と相思相愛の関係になってしまう。しかし二人の仲に気づいた戸沢男爵の夫人が、山名芳三を邸から追い出してしまふ。戸沢弓子は別れに際して、形見に「古鏡」を山名芳三に送る。

・『宿魂鏡』下

故郷の白河に戻った山名芳三は、失意のあまり山間の一小村で、誰とも会わず孤独に暮らしていた。最愛の弓子を慕って、彼女がくれた「古鏡」を眺めるうちに、弓子

の幻が現れる。また同時に怪物も現れる。怪物は「骷髏にして骷髏にあらず、人間にして人間にあらず」というものである。これらの幻を見るうちに、山名芳三は死んでしまう。一方東京の戸沢弓子は、山名芳三を恋い慕うあまり、病床に臥していたが、山名芳三が死んだ時間と同時に死んでしまう。

『宿魂鏡』では、主人公・山名芳三が、生き別れの恋人・戸沢弓子から贈られた「古鏡」を眺めるうちに、怪物と弓子の幻を見るようになり、精神錯乱に陥り死んでしまいます。離れた場所にいる恋人の弓子もまたその時、恐らく同時刻に死にます。

小説名の「宿魂鏡」とは、弓子が芳三に贈った「古鏡」を指しております。「古鏡」「怪物（骷髏にして骷髏にあらず、人間にして人間にあらず）」という怪物、「その鏡を見るうちに精神に異常を来たして死亡する主人公」、などといった要素から見ても、この小説は、島崎藤村の訳文（『紅楼夢』第十二回の「風月宝鑑と賈瑞」の一段）の強い影響下に生まれたものであることは明白です。この点はすでに学界の通説になっ

ていると言えるかと存じます。

『宿魂鏡』では『紅楼夢』とは違って、主人公・山名芳三とヒロイン戸沢弓子が相思相愛の関係に変化しております。弓子が芳三に贈った「古鏡（宿魂鏡）」は、彼女の芳三に対する愛情の証であり、「形見」の品でした。一方、『紅楼夢』の賈瑞は人妻に対する横恋慕であり、宝鏡「風月宝鑑」は、そういった男のよこしまな邪念を専らに治療するという触れ込みの宝物でした。両者の違いは、北村透谷による意識的な改編だったと言えます。

この北村透谷の『宿魂鏡』は、更に、島崎藤村の長篇小説『春』（明治四十一年）に影響を与えた、という指摘があります。朴承柱氏の指摘です（注3）。

島崎藤村は、周知の通り、明治時代の著名な小説家ですが、北村透谷を大変に尊敬しておりました。この長篇小説『春』は、島崎藤村の二十一歳から二十五歳までの時期を描いた自伝小説です。作中の主人公・岸本捨吉は、島崎藤村自身をモデルにしています。また岸本捨吉の友人・青木は、他でもありません、北村透谷をモデルとしています。作中には、岸本捨吉と、「盛岡」と呼ばれる女性（勝子）及び「西京」と呼ば

れる女性（峰子）との交流と悲恋が描かれています。峰子は、岸本に「懐剣」（護身用の短剣）を贈ります。

朴承柱氏は、この「懐剣」の設定は、『宿魂鏡』の「古鏡」の影響下にあると指摘しておられます。朴氏は、島崎藤村が『春』を執筆するにあたって、北村透谷の全集を読み直したという事実をふまえて、以下の三つの共通点を指摘します。

第一に、『宿魂鏡』の「古鏡」と『春』の「懐剣」は、いずれも女性から主人公への別離の「形見」として贈られたものである点。第二に、『宿魂鏡』の「古鏡」と『春』の「懐剣」は、いずれも主人公が懐中にいれて持ち歩いており、「苦悩」の象徴である点。第三に、『宿魂鏡』と『春』には、いずれも、主人公と二人の女性の三角関係が設定されており、作品構成が類似している点です。そして朴氏は、この「懐剣」を岸本と西京との「精神的な恋愛の象徴」とみております。

もしこの指摘が正しければ、以下のように喩えることが可能かと思えます。即ち、清代小説『紅樓夢』中の宝鏡「風月宝鑑」は、明治の時代に、海を越えて日本へと伝わり、自己の外見を次々と変えながら（即ち、①宝鏡「風月宝鑑」↓②古鏡「宿魂鏡」↓③「懐剣」と姿を変えながら）、明治の文人

たち（島崎藤村と北村透谷）の間を駆け巡った、と言えるかと思うのです。

全訳のないこの時代に、すでに『紅樓夢』が、このような形で日本文学に一定の影響を与えていたということは、『紅樓夢』の日本における早期の受容状況」として、注目されてよい状況であるかと思えます。それにしても、原作『紅樓夢』においては、「邪淫の戒め」を象徴していた宝鏡「風月宝鑑」が、①原作『紅樓夢』第十二回↓②島崎藤村の訳文「紅樓夢の一節―風月宝鑑の辞」↓③北村透谷『宿魂鏡』↓④島崎藤村『春』、と四たび移り変わる間に、「戒淫の象徴」から「精神的な恋愛の象徴」へと、徐々にその意味合いを変えていく過程は大変に面白く、当時の明治の文壇を考える上でも興味深いものがあるのではないのでしょうか。この状況は（資料③）にまとめてみました。

（資料③）【文字数の都合上掲載を省略いたします】

さて、明治の文人たち―島崎藤村と北村透谷―に少なからぬ影響を与えました「風月宝鑑の一段」（『紅樓夢』第十二回）

ですが、実はこの一節は「紅学」(『紅楼夢』の研究を指す言葉です)上、さまざまな問題が指摘され、注目される箇所でもあります。

まず文章の「風格」に問題があります。曹雪芹原作部分の全八十回を通して読むと、この部分を中心とした場面(第十一、十二回)は、全書中の優雅なストーリーに反して下品な表現が多く、同じ作者の筆とは、思えない感じがするほど「下品」なのです。島崎藤村の訳文には訳出されておりませんが、賈瑞がなんと大小便の汚物にまみれたりする場面もあります。

(資料④)

賈瑞……只聽頭頂上一聲響啣拉々一淨桶尿糞從上面直潑下來。可巧澆了他一身一頭。賈瑞掌不住啞喲了一聲、忙又掩住口、不敢聲張、滿頭滿臉渾身皆是尿尿、冰冷打戰。

(「庚辰本」第十二回)

賈瑞は……頭のとっぺんでガラガラツと音がしたかと思ふと、おまる一杯分の尿糞が上の方からまっすぐにザザツとふってまいりました。折悪しく、ちょうど彼の頭と身体いっぱいにふりかかっています。賈瑞は思わず

「啞喲」と一聲あげてしまいましたが、いそぎ又口をしつかりと塞いで、声をあげないようにします。頭から顔から全身皆尿と糞で、氷のように冷たくてブルブルと震えます。

ここでは憚りがあるので原文は掲げませんが、かなり露骨な性的表現すらあります。異質語彙が出現するとの指摘もあります(注4)。更に、この一節の内容が前後から完全に孤立しているという問題もあります。そもそもこの賈瑞という人物は、『紅楼夢』の主人公でも何でもありません。この一節のみに登場する人物なのです。そして宝鏡「風月宝鑑」もまた、この一節以外には一度も登場しません。そして何より、この宝鏡の名称である「風月宝鑑」という四文字は、『紅楼夢』成立を考える上で、従来注目されてきたキーワードでした。まず『紅楼夢』の本文・第一回(資料⑤)をごらんください。

次のような箇所があります。

(資料⑤)

空空道人……將這石頭記再檢閱一遍、……方從頭至尾抄

録回來、問世傳奇、因空見色、由色生情、傳情入色、自
色悟空、遂易名爲情僧、改「石頭記」爲「情僧錄」。至吳
玉峰題曰「紅樓夢」。東魯孔梅溪則題曰「風月寶鑑」。後
因曹雪芹于悼紅軒中披閱十載、增刪五次、纂成目錄、分
出章回、則題曰「金陵十二釵」……至脂硯齋甲戌抄閱再
評、仍用「石頭記」。(「甲戌本」第一回)

空空道人は、……この石頭記をもう一度見て、……初め
から終わりまで写しとり世間に伝奇として問いました。

(彼は)空に因つて色を見て、色から情を生じ、情を伝
えて色に入り、色により空を悟り、かくて名前を情僧と
改め、「石頭記」を「情僧録」と改めました。やがて吳玉
峰が「紅樓夢」と題して、東魯の孔梅溪が「風月宝鑑」
と題しました。後に曹雪芹が悼紅軒で十年間披閱し、五
度増刪し、目錄を編纂し、章回に分けて「金陵十二釵」
と題しました。……脂硯齋が甲戌の年に抄閱し再び評を
加えた時に、元通り「石頭記」の書名を用いたのです。

これは、『紅樓夢』成立問題を考察する際の鍵となる記述です
ので、後でまた述べますが、ここには「石頭記」「情僧録」「紅

樓夢」「風月宝鑑」「金陵十二釵」という五つの書名が記され
ております。ここに「風月宝鑑」という言葉(書名)が出てく
るのです。

さらに、注目すべきは、この箇所が付されております評で
す。『紅樓夢』の古い抄本には、「脂硯齋評」と総称される評
が多々書き込まれています。これらの評は、作者曹雪芹の親
族によつて記されたものと考えられております。それらの評
の中には、作者にまつわるさまざま裏話が記されることが
あり、作品の創作過程を窺う上で興味深い資料となります。(資
料⑥)を御覧ください。

(資料⑥)

雪芹舊有風月寶鑑之書、乃其弟棠村序也。今棠村已逝、
余睹新懷舊、故仍因之。(「甲戌本」第一回眉批)

雪芹にはもともと「風月宝鑑」の書があり、そこにはそ
の弟棠村の序が付してあった。今棠村は已にあの世にい
つてしまった。私は新をみて旧を懐かしく思った。だか
らやはりこれに因つたのだ。

これは先ほど(資料⑤)にて掲げました本文の「風月宝鑑」という文字に付された評です。この評(眉批)は、作者曹雪芹がかつて、「風月宝鑑」という書を執筆したことがあった、ということを示しております。(なおここで言う「風月宝鑑」は書名の意でして、先(資料①)に掲げた一節に出てくるような「鏡」ではありません)。言うまでも無くこれは『紅樓夢』成立過程を窺う上での、重要な、そして唯一の手がかりと言えるでしょう。

この曹雪芹の旧稿「風月宝鑑」という書に関して、学界(紅学界)の共通認識は次のようなものです。第一に、まず、他ならぬ「風月宝鑑」という名の鏡が出てくる、島崎藤村が訳出した一節(『紅樓夢』第十二回)は、元来、「風月宝鑑」中の一節に基づくものであること。第二に、「風月宝鑑(色恋の鏡)」という書名から推して、その内容は、男女の情欲を戒める「戒淫」を主題とした内容であったこと。第三に、その描写も『金瓶梅』のように、かなり淫猥なものであったであろうこと。第四に、現行本中に時折みられる、男女の情欲に説き及ぶ場面の多くは、旧稿「風月宝鑑」中の一節に基づくものであること、等です。

ただし『紅樓夢』成立過程において、この「風月宝鑑」という書をどう位置付けるかについては学説が分かれます。(資料⑦)を御覧下さい。それらは概ね二つの見方に分けることができます。一つは、「風月宝鑑」を現行本『紅樓夢』の雛型原稿とみなす説。そしてもう一つは、「風月宝鑑」を現行本『紅樓夢』とは全く別個の小説と位置付け、その内容の一部分が現行本に挿入された(採用された)のだとする説です(注5)。前者は、旧稿「風月宝鑑」が改訂されて現行本が出来上がったとみるので、「一稿多改」説と呼ばれます。後者は、「現行本の雛型原稿」とそれとは別個の小説「風月宝鑑」との「二書」が「合成」して現行本が出来上がったとみるので「二書合成」説と呼ばれます。

(資料⑦) 【「風月宝鑑」位置づけに対する学界の二つの説】

① 「一稿多改」説……「風月宝鑑」を現行本『紅樓夢』の雛型原稿とみなす説(胡适、俞平伯、伊藤漱平等等)

② 「二書合成」説……「風月宝鑑」を現行本『紅樓夢』とは全く別個の小説と位置付ける。現行本とそれと

は別個の小説「風月宝鑑」の二書が合成して現行本が出来上がったとみる説（周紹良、太田辰夫、杜春耕等等）

では、この二つの説のうち、どちらがより合理的な見方と言えるでしょうか。結論を先に申しますと、私は、「風月宝鑑」は元来現行本『紅樓夢』とは全く別個の書であり、その内容の一部が後になって『紅樓夢』に採用された（挿入された）とする見方、すなわち「合成」説が合理的であると考えておられます。私がこちらの立場をとります理由はいくつかあります。本日は時間が限られておりますので、それをすべてご紹介させていただく余裕がございませんので、わかりやすい一例のみ申し上げたいと思います。人物形象の分裂という問題です。主人公賈宝玉はいつも「男は泥で出来た身体」（第二回）等と言って男性を蔑視していますが、その一方で、秦鍾という男性と異常なまでに親しくする場面が描かれております（第七く十六回）。甚だしきに至っては、二人は男性同士で何やらいかがわしい性的な関係を持ったかのような記述さえあります（第十五回）。つまり、賈宝玉の形象には分裂があるのです。

同様に先ほど取り上げました王熙鳳にも形象の分裂がみられます。夫、賈璉が密かに尤二姐という女性を妾として娶った事を知った王熙鳳は、計略を設けて、ついには尤二姐を死に追い込みます（第六十三く七十回）。ここでは、平気で人を死に追い込む人物として描かれています。また、その際には、秘密を知った張華という人物に対しても、その人物そのものを始末してしまおうとするような発言すらしております（第六十九回）。これらには人の命など何とも思わない、『金瓶梅』の潘金蓮のような、強烈な悪女の形象が描かれていると言えるでしょう。しかし、第七十一回には、姑・邢夫人から辱めを受けた王熙鳳が、人影で涙を流し、真つ赤に目を腫らしたまま人前に出てくる、というような場面が描写されております。ここには、大家族における嫁姑問題に悩む一人の嫁の弱々しい姿が描かれています。先ほどの強烈な悪女の姿とは一致しません。

実は、「秦鍾とその姉秦可卿を中心とした一節」（第七回く十六回）と「尤二姐と尤三姐の姉妹を中心とした一節」（第六十三回く七十回）は、いずれも「戒淫」のテーマを含んでいること等から、元来「風月宝鑑」中の一節であったとみられ

ており、それは学界の通説となっております。つまり今指摘しました賈宝玉と王熙鳳の二人の性格の分裂の一方の側面は、いずれも「風月宝鑑」内のものなのです。言葉を換えますならば、賈宝玉と王熙鳳は、「風月宝鑑」内の形象と、その他の部分での形象が異なっているのです。もし「二稿多改」説のように、『紅樓夢』の雛型の旧稿「風月宝鑑」の上に修正を重ねて現行本『紅樓夢』が出来上がったのだとすれば、当然人物の性格は、前後と統一が計られてしかるべきだと思います。

しかし、『紅樓夢』の成立過程の晩期において、『紅樓夢』とは全く別個の小説「風月宝鑑」の一部の内容が、『紅樓夢』（の雛形原稿）の中に部分的に挿入されたのだ、と考えれば（即ち「二書」合成）説です）、人物形象に不統一が生じるのも無理はないかと思えます。これは一例にすぎませんが、こういった理由から私は「合成」説の立場をとっております。

*

今申しましたとおり、「戒淫（淫を戒める）」というテーマから考えて、現行本『紅樓夢』中には、小説「風月宝鑑」に基づくと推定される箇所がいくつか見られます。しかし、肝心の「風月宝鑑」という名の鏡が実際に登場するのは、本日

冒頭に言及しました島崎藤村が訳出した一節（以下「賈瑞の一節」と略称します）のみでありまして、他の箇所には一度もこの鏡は登場しませんし、又言及されることもありません。そして、先にも申しましたとおり「賈瑞の一節」は、文章の風格も著しく劣っております（下品な表現描写など）。その理由はいったい何なのでしょうか。果たしてこの「賈瑞の一節」は、学界の通説の通りに、本当に小説「風月宝鑑」に基づく一節なのでしょう。以下、この一節（「賈瑞の一節」と「風月宝鑑」という書との関わりについてももう少し深く掘り下げてみたいと思います。

「賈瑞の一節」（第十二回）の次の回は、秦可卿という女性の死を描いた第十三回です。現行本『紅樓夢』では、この第十三回に、秦可卿は突然に病死してしまいます。しかし元来の秦可卿の死は、病死とは異なるものでした。「脂硯齋評」に（資料⑧）のように書かれています。

（資料⑧）

「秦可卿淫喪天香樓」、作者用史筆也。老朽因有魂托鳳姐賈家後事二件、豈是安富尊榮坐享人能想得得到者。其言其

意、令人悲切感服。姑赦之。因命芹溪刪去「遺簪」、「更衣」諸文。是以此回只十頁。刪去天香樓一節、少去四、五頁也。(靖藏本)第十三回前總批(注6)

「秦可卿淫喪天香樓」の一節では作者は史筆を用いている。(秦可卿の)魂が、鳳姐に賈家の後事二件を託す場面は、富貴に満足している人と思いつけるものだろうか。その言葉、その意味は読む人を悲痛にさせ、感服させる。

(だからこの一節は)しばらく赦すことにした。そこで芹溪(雪芹)に命じて「遺簪」、「更衣」の諸文を削らせた。このような訳でこの回は只十頁ばかりなのである。天香樓の一節を削った事によって、四、五頁少なくなっただのである。

この評から、元来のこの一節の回目には「秦可卿淫喪天香樓」という文句があり、作者の家庭内の事件を題材にしたものだったのですが(「史筆」、評者が雪芹に命じて「天香樓の一節」の四、五頁を削らせたものということがわかります。現在紅学界においては、様々な痕跡から、元々の秦可卿の死(「天香樓の一節」)は、概ね次のような内容であったと推定されて

おります。

即ち、秦可卿は舅の賈珍と男女としての関係をもつようになり、それを侍女に知られ、恥じた秦可卿が「天香樓」という場所で首をつって死ぬ、という内容です。そしてそれは実際に曹雪芹の身近にあった出来事に取材したものであったと考えられております(注7)。評者が曹雪芹に削除を命じた理由も、それを憚ったもののようなようです。

さて、この秦可卿の死(「天香樓の一節」)は、元來は小説「風月宝鑑」中の一節で、後に『紅樓夢』に挿入されたものとみてよいと思います。嫁と舅の男女関係(情交)とその嫁の縊死、という展開は、まさに「戒淫(淫を戒める)」というテーマそのものです。前掲の評(資料⑧)から、秦可卿には実在のモデルがいたことが窺われますが、賈宝玉を作者(曹雪芹)の分身とみなせば、作者はこの人物に淡い恋情のようなものを抱いていたのではないかとさえ感じられます(第五回の描写などからそのように感じられます)。そう考えれば、元來のこの一節は、そのモデルの女性への哀悼および「乱れた情交への憎しみ」というテーマによって書かれた、作者にとつてとても重要な場面だったのでないかと推察できます。

そもそも小説「風月宝鑑」執筆の動機はそこにあつたのではないか、と私は考えます。

しかしこの一節（「天香楼の一節」）は、『紅樓夢』（の原型）に挿入された際、評者の命令によつてその内容の一部を削らざるをえなくなったため、極めて暗示的な描き方になつてしまいました。これでは、乱れた情交への憎しみ（そしてそれを戒めるといふ警告）は、まるで読者に伝わりません。そこで俄かに代役として生まれたのが先の「賈瑞の一節」だつたのではないでしょうか。

賈瑞の一連の行為を通して、作者が提示しようとしているのは明らかに「戒淫（淫を戒める）」です。倫理に反する男の情欲とその代償としての死、という展開は、まさに元来の秦可卿の死（舅と嫁の情事↓嫁の自殺）と同じと言えるでしょう。この場面を秦可卿の死の直前に設けることによつて、間接的に元来の秦可卿の死が元来持つていたメッセージ（即ち「戒淫」）を読者に示そうとしたのではないのでしょうか。またそれは同時に小説「風月宝鑑」全体のテーマと同じであることから、この一節に「風月宝鑑」の名称の小道具を「鏡」として登場させたのではないのでしょうか。そもそも「風月宝鑑」

の「宝鑑」とは、小道具としての「鏡」ではなく、明代の馮夢龍の『情天寶鑑』のような、読者の規範となるもの、の意味で使われた「書名」であつたはずと思われます。その小説中には、宝鏡「風月宝鑑」が登場しなかつたと考えても何の不思議もありません。ただし、逆の規範、すなわち「この小説の登場人物のようにはなつてはいけないよ、裏から見ても登場人物のようにならないようにしなさい」、という意味であつたと思われます。「賈瑞の一節」で道士が賈瑞に、「宝鏡」風月宝鑑を正面から見ると、裏から見よ」と忠告したのは、まさに小説「風月宝鑑」の読み方を比喩的に示しているのです。即ち、宝鏡「風月宝鑑」は小説「風月宝鑑」の比喩なのです。当の第十二回の脂硯齋評には、本文中の鏡「風月宝鑑」を鏡そのものではなく、書物として見ているものがいくつかあります。例えば（資料⑨）を御覧下さい。

（資料⑨）

・鏡は表と裏の両面が映せるといふ箇所に付された評

「此書表裏皆有喻也。（この書物の表と裏には皆たとえがある）」

・その鏡を決して正面から覗いてはいけない、という言葉に付された評

「観者記之。不要看這書正面、方是會看。（読者はこれを見ておきなさい。この書を正面から見てはいけない、そうしてこそこの書物が読める）」

・鏡によって孫を殺された賈代儒が鏡を罵る場面に付された評

「此書不免腐儒一謗。（この書物は腐儒の謗りを免がれまい）」

・鏡は焼くべきである、という言葉に付された評

「凡野史俱可燬、獨此書不可燬。（すべての野史は焼くべきだが、この書物だけは焼くべきではない）」

（いずれも「己卯本」「庚辰本」「王府本」「有正本」の各本に付された評）

等です。これらはみな、鏡「風月宝鑑」を鏡そのものではない

く、書物として扱っているように思われます。

小説「風月宝鑑」の比喻（即ち、その分身である「鏡」）が登場するということは、もはや小説「風月宝鑑」の内部からは飛び出ている、と私には思えます。つまり小説「風月宝鑑」には「賈瑞の一節」は、存在せず、宝鏡「風月宝鑑」が登場することもなかったことでしょう。

以上申しましたとおり、「賈瑞の一節」は、小説「風月宝鑑」と『紅樓夢』の二書が「合成」する際に新たに設けられた一節であった、と私は考えます。先に申し上げました「賈瑞の一節」が短く、前後からは独立している理由もここにあると思います。

新たに設けられたこの「賈瑞の一節」では、秦可卿を哀悼する意識は排除して、ひたすら男女の情交への警告を発することに主眼が置かれていたため、登場人物をことさらに愚かな男性（賈瑞）として設定し、文章もなるだけその愚かさを強調するように書かれたものと思われまます。また、事実を描いた秦可卿の一節が評者の批判を受けて、その結果新たに作り上げた一節であるため、虚構性を強調するように筆が進められたと思われまます。賈瑞の一連の行動をより諧謔的に描こ

うとした結果、『紅樓夢』全体からは、浮いたストーリーになってしまったのではないだろうか。

以上を整理すれば、私の推定は(資料⑩)のようにまとめることができます。

(資料⑩) (「風月宝鑑」をめぐる成立過程【推定】)

(I) 元来、『紅樓夢』(の原型)とは別個の小説「風月宝鑑」が存在した。それは、秦可卿のモデルを哀悼する意が込められたノンフィクション風の小説であり、宝鏡「風月宝鑑」が出現するわけではなかった。

(II) 後に、小説「風月宝鑑」中のいくつかの場面が『紅樓夢』(の原型)に挿入されることになった。

(III) しかしその中の「秦可卿の死」が『紅樓夢』(の原型)に挿入される際、「脂硯齋評」評者の指示により、内容が大幅に削除・変更され、「戒淫」の主旨が消えた。

(IV) そのため、「戒淫」の意を色濃く出した「賈瑞の一節」を俄かに作り、秦可卿の死の直前に置いた。この「戒淫」は、とりもなおさず小説「風月宝鑑」の主題でもあるため、この一節に、宝鏡「風月宝鑑」を登場させた。

島崎藤村が翻訳した一節は、こうして誕生した一節だったと私は推定します。

*

『紅樓夢』は他の白話小説、例えば『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』に比して日本ではあまり流行しませんでした。理由の一つには、難解なこの小説全体を読み通さねばその面白さがわかりにくいということもあつたと思います。その反対に、『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』などは、一部分だけでも楽しめる箇所が多くあります。しかし、島崎藤村が訳出した「賈瑞の一節」は、短く独立しており、その部分だけだとまっています。そういう意味でわかりやすい一節です。全訳のまだない明治においても、受容しやすい一節だったと言えるでしょう。以上は、この一節が短く独立している理由について、成立の面(「風月宝鑑」の位置づけ)から推測を述べてみました。

次に、少し視点を換えまして、「風月宝鑑」以外の書名について考えてみたいと思います。本日は、『紅樓夢』に設定されている神仙世界に焦点を当ててみたいと思います。

『紅樓夢』は、日常生活を細かに描いた小説なのですが、その一方で、冒頭の第一回、及び、少し冒頭から離れた第五回等には不思議な神話のような世界（以下「神仙世界」と称したいと思います）が設定されており。

まず第五回に描かれている神仙世界に注目してみたいと思います。主人公・賈宝玉の体験にそくして、この場面の展開を確認してみましょう。賈宝玉は夢の中で「太虚幻境」と呼ばれる仙界に迷い込みます。そこで彼は「警幻仙姑」と名乗る仙女に出会うのですが、その際、「金陵十二釵冊」と名づけられた帳簿に関心を示し、警幻仙姑に特に頼みこんでその中身を見せてもらいます。そこには宝玉周辺の女性たち（「金陵十二釵」と呼ばれる十二人の女性たち）の悲劇的未来が、詩と絵を通して暗示されていました。続いての場面で警幻仙姑は、仙女たちに「紅樓夢仙曲」という曲を演奏させて、やはり宝玉に聞かせます。曲の内容は、先ほどの「金陵十二釵

冊」中の詩や絵と対応する形で、十二人の女性（金陵十二釵）の悲劇的な未来が暗示されます。

またこれら「金陵十二釵冊」「紅樓夢仙曲」には、十二人の女性の悲劇的未来が暗示されている合間に、とどこどころ大貴族賈家の子孫が不肖であるため、賈家に悲劇的末路が待っていることが暗示されています。すなわち「金陵十二釵冊」「紅樓夢仙曲」を通して、警幻仙姑が提示した中身は、宝玉周辺の女性たちの悲劇的未来と、賈家没落の未来だったのです。

しかし警幻仙姑の訓戒は、ここで終わるわけではありません。続けて警幻仙姑は、宝玉と自分の妹の可卿（秦可卿と同じ名前の仙女）を結婚させるのです。

（資料⑪）

警幻道「……再將吾妹一人、乳名兼美、字可卿者、許配與汝。今夕良時、即可成姻。不過領（令）汝領略此仙閨幻境之風光尚然如此、何況塵境之情景哉。……」

説畢、便秘授以雲雨之事。推寶玉入房、將門掩上自去。

那寶恍々惚々、依警幻所囑之言、未免有兒女之事、難

以盡述。(「庚辰本」第五回)

警幻は言います。「……更に私の妹の一人、幼名を兼美、

字を可卿という者と汝を結婚させてあげます。今宵は日柄が良いので、さつそく婚姻を成すがよいでしょう。

汝にこの仙女の住居である太虚幻境の風光でさえも依然こんなものだから、まして俗界の情景など(なんてことではないのだ)、とわからせようということにすぎないのでですよ。……」言い終わると、ひそかに雲雨の事を授けるのでした。そこで宝玉を部屋の中へと押し入れると、戸を閉めて去ってしまいました。宝(玉)は恍惚として、警幻仙姑に言い付けられた言葉に従いましたが、どうしても男女の事に関わりませんので、それはことごとく述べ難いものです。

警幻仙姑は宝玉に男女間の情事である「雲雨之事」を伝授し、妹の「可卿」と名乗る女性と結婚させ、それ(雲雨之事)を実践させます。男女間の情事などつまらぬ事にすぎないという事を、実践を通して悟らせようということのようです。この訓戒の意図に関して注目しうるのは、警幻仙姑自身が宝玉

に語る(資料⑫)の言葉です。

(資料⑫)

(警幻)「……吾所愛汝者、乃天下古今第一淫人也。」

……警幻道「……淫雖一理、意則有別。如世之好淫者、不過悅容貌、喜歌舞、調笑無厭、雲雨無時、恨不能盡天下之美女供我片時之趣興、此皆皮膚淫濫之蠢物耳。

如爾、則天分中生成一段癡情。吾輩推之爲『意淫』。『意淫』二字、惟心會而不可口傳。可神通而不可語達。……」(「庚辰本」第五回)

(警幻は)「……私が汝を愛する点は、(汝が)天下古今第一の淫人であるという点なのです。……警幻が言いますには、「……淫とは一つの理ですけれども、意味にはさまざま違いがあります。世間の淫を好む者のようなのは、ただ容貌を好み、歌舞を好み、ふざけあって飽きることなく、雲雨は四六時中で、すべての天下の美女を自分の一時の享樂に供する事ができないのを恨めしく思うにすぎないのであり、こういった者は皆、皮膚淫濫のやくざ者にすぎないので。汝の如き

は、先天的に痴情をそなえております。私たちはこれを『意淫』と申しています。『意淫』の二字は、ただ心で会得するもので、口では伝えることができません。精神で会得するものであって言葉で悟るものではないのです。……」

ここで警幻仙姑は宝玉に、「雲雨の事」一辺倒（肉欲一辺倒）の男女関係に對置する「意淫」という境地を説いて聞かせております。宝玉が「天下古今第一の淫人」であるから氣に入った、という理由による「訓戒」です。「雲雨の事」一辺倒（即ち肉欲一辺倒）の男女関係の否定と「意淫」の境地の推奨を目的としているこの訓戒は、「戒淫（淫を戒める）」と言えるかと思えます。

以上見てきましたように、第五回の太虚幻境における神仙世界（以下「警幻仙姑の神仙世界」と略称します）において、警幻仙姑は、宝玉に、「金陵十二釵冊」「紅樓夢仙曲」を提示することにより、眼の前の幸福は将来長くは続かないことを告げると同時に、自分の妹の可卿と情事を試みさせることによって、「戒淫」の訓戒を行っているのです。

*

次にもう一步深くこの場面の設定意義に関して考察してみたいと思います。「警幻仙姑の神仙世界」の「入口」と「出口」に注目してみましょう。

まず「入口」ですが、この回、賈宝玉は花見に寧国邸を訪れた際、眠気を覚えたため、「秦可卿」に案内されて彼女の部屋で寝込んでしまいます。そして宝玉は夢の中で仙界・太虚幻境を訪れます。すなわち「警幻仙姑の神仙世界」の「入口」は、秦可卿の部屋なのです。この「入口」に注目した際、太虚幻境で宝玉が結婚し、「雲雨の事」（男女間の情事）をとものに体験した「可卿」と名乗る仙女は、現実世界の「秦可卿」を暗示していることは明白です。この点に関しては、従来、宝玉が夢で太虚幻境を訪れ、警幻仙姑の妹「可卿」と結婚するという場面は、宝玉が秦可卿と男女関係を結んだことをボカシたものだとの解釈が、古くからなされています（注8）。その意味からすれば、この「警幻仙姑の神仙世界」は、そもそも場面設定そのものが、男女間の情事と密接に結びついていると言いうことができます。

次に「出口」に注目してみます。太虚幻境で「可卿（警幻

仙姑の妹」と結婚した翌日、宝玉は黒い溪流へとやつてきま
す。

(資料⑬)

至次日便柔情繾綣、軟語温存、與可卿難解難分。因二
人攜手出去遊玩之時、忽至了一個所在、……迎面一道
黑溪阻路、……警幻道「此即迷津也。深有萬丈、遙亘
千里。……耳(爾)今偶遊至此、設如墮落其中、則深
負我從前諄々警戒之語矣。」話猶未了、只聽迷津內水響
如雷、竟有許多夜叉海鬼將寶玉拖將下去。嚇得寶玉汗
下如雨、一面失聲喊叫「可卿救我。」(庚辰本「第五回」)
次の日になると柔らかな情愛が纏綿とまとわりつき、
優しい言葉で温かくいたわれ、可卿とは切つても切
れないようになっていたのでありました。二人はそこ
で手を携えて遊びに出かけますがその時、突然、ある
場所へと至り、……真正面に一すじの黒い溪流が路を
さえぎっており、……警幻が言いますには、「これは迷
津(迷いの渡し)です。万丈の深さがあり、遙か千里
にわたっておりませす。……汝は今たまたまここにやっ

てきましたけど、もしその中に落ちこんでしまったら、
私が前に口をすっぱくして戒めた言葉に深く背くこと
になってしまいますよ。」その言葉も終わらぬ内に、迷
津の水が雷の如く響き、無数の夜叉、海鬼が宝玉をひ
っぱりこみました。驚いた宝玉は雨のように汗を流し、
一方で思わず「可卿、僕を助けて。」と叫ぶのでした。

ここで宝玉は夢からさめ、太虚幻境から現実世界へと戻りま
す。これが「警幻仙姑の神仙世界」の「出口」です。男女関
係を結んだ「可卿」と離れがたい気持ちを抱いたまま、彼女
と二人してやってきたこの「迷津」とは、落ち込んでしまえ
ば警幻仙姑の戒めに背くことになってしまう所である、と警
幻仙姑は言っております。警幻仙姑の言う「口をすっぱくし
て戒めた言葉(諄々警戒之語)」とは、先に(資料⑫)で掲げ
ました警幻仙姑の「戒淫」の言葉を指しておりますが、この
戒めを無にしてしまう「迷津」とはすなわち、〃男女間の「雲
雨の事」をもとにした色恋〃(以下これを「色恋」と略称し
ます)の迷いの境地を象徴したものである事は容易に想像が
つきます。「可卿」と男女関係を持った次の日、その情を断ち

難いまま、「迷津」（「色恋」の迷い）に溺れてしまえば、当然、男女間の「色恋」などつまらぬものにすぎないという警幻仙姑の前日の「戒淫」に背くことになってしまいます。以上のように見た際、宝玉がせっかく警幻仙姑から受けた「色恋」の戒め（「戒淫」）を（「迷津」）に、落ち込んだことにより）無にして現実世界へと戻り、「色恋」の世界へと迷いこんでいくという、その後の現実世界における展開が予想されません。

そして実際に、現実世界に帰還した宝玉は、ただちに侍女の襲人を相手に、夢で警幻仙姑に教えられた「雲雨之事」を試みるのです（資料⑭）をご覧ください。

（資料⑭）

（宝玉）便把夢中之事細說與襲人聽了。然後說至警幻所授雲雨之情、羞的襲人掩面伏身而笑。寶玉……遂強襲人同領警幻所訓雲雨之事。（庚辰本）第六回）

（宝玉は）そこで夢の中の事を細かに襲人に語ります。そして警幻が授けた雲雨の情の事に話し及ぶと、襲人は恥ずかしがって顔を覆って身をかがめて笑うのでし

た。宝玉は……とうとう襲人にせがんでともに警幻が教えてくれた雲雨の事を会得するのです。

これは彼（賈宝玉）が「色恋」の世界へと迷いこむ第一歩として設定された場面ということができましよう。こう見れば、「警幻仙姑の神仙世界」は、『紅樓夢』の現実世界における男女間の「色恋」に関する場面の発端となっていると言えます。即ち、少年期の主人公が神仙世界で見知った男女間の「色恋」を、成長とともに現実世界で時間をかけて味わうという展開です。

このように見た際、「警幻仙姑の神仙世界」では、警幻仙姑は「金陵十二釵冊」や「紅樓夢仙曲」の提示なども行なっていますが、場面設定そのものが、『紅樓夢』中における男女間の「色恋」の場面、すなわち「戒淫」の主題と強く結びついたものであることが見て取れるかと思えます。

*

現行本『紅樓夢』には、この「警幻仙姑の神仙世界」の他に更に二つの、神仙世界を舞台とする場面が存在します。先ほどまでは、「警幻仙姑の神仙世界」が『紅樓夢』中における

男女間の「色恋」の場面と密接に関わっていることを述べてきました。それらの神仙世界はどうか。まず第一回冒頭部分の設定に注目してみたいと思います。(資料⑮)に梗概を掲げましたので、御覧下さい。

(資料⑮) 「石の神話」(要約)

女媧氏が天を修繕する際、使い余された一個の「石」が大荒山無稽崖青埂峯のふもとに捨てられた。ある日その「石」は、僧侶と道士の話す俗世間の話題に興味を引かれ、僧侶と道士に俗世間へ連れてつてくれるよう頼む。そこで僧侶は、この「石」を美玉に変え俗世間に送りこむ。美玉となった「石」は賈宝玉の口に含まれて世に落ち、彼の人生を観察する。後、「石」は見てきた経歴を「石」自らの上に書き記す。これが「石の物語」、つまり「石頭記」(すなわち現行本『紅樓夢』)である。

以下便宜上、この神話を「石の神話」と呼ぶことにしたいと思います。この「石」は、『紅樓夢』の現実世界において、主

人公賈宝玉が常に帯びている「通靈宝玉」として登場する中心となります。この「通靈宝玉」が観察者となって、賈宝玉を中心とする物語が叙述されるのです。『紅樓夢』の古いテキストはみな「石頭記」の書名になっておりますが、それはこの設定に由来するものです。すなわちこの設定は、この書(「石頭記」)の「縁起」の役割を担っていると考えるでしょう。

また同回(第一回)には引き続きもう一つ、神仙世界に関わるエピソード「還淚姻縁譚」(注9)が提示されます。ある日、甄士隱という人物が昼寝をしていると、夢の中で僧侶が道士に次のような話を話しているのを耳にします。(資料⑯)を御覧下さい。

(資料⑯) 「還淚因縁譚」

那僧笑道「……西方靈河岸上三生石畔有絳珠草一株。

時_レ有赤瑕宮神瑛侍者日以甘露灌溉、這絳珠草始得久延歲月。後來既受天地精華、復得雨露滋養、遂得脫卻艸

胎木質得換人形、僅修成個女體。終日遊於離恨天外、

飢則食蜜青果爲膳、渴則飲灌愁海水爲湯。只因尚未酬報灌溉之德、故甚至五内便鬱結着一段纏綿不盡之意。

恰近日這神瑛侍者凡心偶熾、乘此昌明太平朝世、意欲下凡、造歷幻緣、已在警幻仙子案前掛了號。警幻亦曾問及灌溉之情未償、趁此倒可了結的。那絳珠仙子道「他是甘露之惠、我竝無水可還。他既下世爲人、我也去下世爲人、但把我一生所有的眼淚還他、也償還得過他了。」因此一事、就勾出多少風流冤家來、陪他們去了結此案。」

〔「庚辰本」第一回〕

その僧侶は笑つて言います。「……西方、靈河の岸の三生石のほとりに絳珠草が一株あつた。時に赤瑕宮の神瑛侍者なる者がいて、毎日甘露を（絳珠草に）そそいでやつたので、この絳珠草ははじめて長い歳月を得ることができた（命をのばすことができた）。後に、天地の精華を受けていた上に、更にまた雨露の滋養を得たものだから、ついに草の骨組み木の体質から脱却して、人の形に変わり、女体のようになつた。一日じゅう離恨天の外で遊び、飢えれば蜜青果を食べて食事とし、渴けば灌愁海の水を飲んでスープとしていた。ただ未だ（神瑛侍者が甘露を）そそいでくれた恵みに報いていないので、ついには五臟に纏綿として尽きない気持

ちが鬱積するまでになつた。ちようど近ごろこの神瑛侍者がたまたま俗心を燃やし、この盛んで輝かしい太平の世に乗り、下界に降り、人間世界を経験しようとして、すでに警幻仙子の所で手続きをすませた。警幻（仙子）もまたかつて、（神瑛侍者が甘露を）そそいだ好意に（絳珠草が）未だ恩返しをしていない事を聞き及んでいたから、これに乗じて始末をつけたらよい（と絳珠草に勧めた）。その絳珠仙子は『あの方（神瑛侍者）の甘露の恵みに対して、私は何の返す水もない。あの方が下界に降りて人となる以上、私も下界に降りて人となつて、一生分の涙をあの方に返せば恩返しとできるでしょう。』と言う。この一事件によって、たくさんすきものたちが、これらに付き添つてこの事件を始末しに（下界へ）行くことになつた。」

僧侶の語る「神瑛侍者」は主人公賈宝玉に、「絳珠仙子」はヒロイン林黛玉に転生することとなります。

『紅樓夢』の現実世界において、宝玉と黛玉の「恋愛譚」は、『紅樓夢』中の大きな主題の一つとして描かれますが、二

人の恋愛描写には、いつも黛玉の涙がつきまといまいます。例えば(資料⑰)の如くです。

(資料⑰)

這日不知爲何、他二人言語有些不合起來。黛玉又氣的獨在房中垂淚。(「庚辰本」第五回)

この日もどういふ訳かわかりませんが、二人(宝玉と黛玉)は言葉にいささか行き違いがありました。黛玉は例によつて怒つて一人部屋の中で涙を流しておりません。

先ほどの「還淚姻縁譚」における、絳珠仙子の、涙で神瑛侍者に恩返しをするという発想は、この黛玉の「恋の涙」に呼応していると言えるでしょう。すなわち「還淚姻縁譚」は、『紅樓夢』中の「恋愛譚」という主題の発端となっているのです。

重要な主題の発端となるこれらのエピソードは、『紅樓夢』において「導入部」として設定されたものであると言えます。そして『紅樓夢』の「導入部」という観点から見ると、「石の神話」「還淚姻縁譚」の他に更にもう一つ、注目しうるエピソード

が第一、二回に設定されています。先の「還淚姻縁譚」を夢に見た甄士隱を中心としたエピソードです。これも梗概を(資料⑱)に示しましたので御覧下さい。

(資料⑱) 「甄士隱と賈雨村の物語」(要約)

姑蘇に住む甄士隱は土地の名士として悠悠自適な生活を送っていた。その隣には貧乏書生の賈雨村が仮住まわしていた。中秋の節句の折、賈雨村は甄士隱に、科挙の試験を受けたいが先立つ費用が無い旨を打ち明ける。甄士隱は早速費用を用立てて賈雨村に貸し与える。雨村は翌日旅立つ。やがて元宵の節句の折、甄士隱の一人娘英蓮が失踪してしまう。続く三月、甄士隱の家は火事に巻き込まれすっかり焼けてしまう。しかも災害が続く、甄士隱は仕方なく妻の実家に身を寄せることとなる。しかしそこで甄士隱は色々と窮屈な生活を強いられる。ある日甄士隱は一人の道士に出会い、そのままその道士につき従つて失踪してしまう。逆に賈雨村は科挙に合格し、その土地に知府として赴任する。しかし賈雨村は上役に弾劾され、再び役を解かれてし

まう。

以下このエピソードを便宜上「甄士隱と賈雨村の物語」と略称することになります。この話の中で、甄士隱が瞬く間に土地の名士から一文無しへ、と没落したのに対して、貧乏書生だった賈雨村は科挙に及第し高官へ、と出世します。つまりこの「甄士隱と賈雨村の物語」に描かれているのは、甄士隱と賈雨村の人生の対比であり、そこに込められた意味は、栄枯の移り代わり、「富貴の無常」という考え方であるに違いありません。知府にまでなった賈雨村が、弾劾され免職になるという最後の展開もやはり富貴の無常を意味しているように思われます。『紅樓夢』の大きな主題の一つに、大貴族買家の豪華な生活とその没落による無常（以下「貴族生活崩壊譚」と略称したいと思います）というものがあります。「甄士隱と賈雨村の物語」は、『紅樓夢』中の「貴族生活崩壊譚」の縮図になっていると言えるでしょう。すなわち「甄士隱と賈雨村の物語」と『紅樓夢』中の「貴族生活崩壊譚」の関係は、「話本」における「入話」と「正話」の関係に相当し、その意味においては「甄士隱と賈雨村の物語」は『紅樓夢』の「枕」と言える

と思います。

これらの設定は、表面上互いに絡み合っており、総体的に『紅樓夢』の導入部となっております。しかしそれらの関わりは表面上のものにすぎず、その関わりを断ち切っても十分それぞれが独立したエピソードとして成り立ちます。そしてそれらはそれぞれ、別個の角度から『紅樓夢』の導入部としての役割を担っております。（資料⑱）を御覧下さい。すなわち、①「石の神話」は「石頭記」という書物（現行本『紅樓夢』という物語そのものの縁起となっており、②「還涙姻縁譚」は『紅樓夢』中の「恋愛譚」の発端をなし、③「甄士隱と賈雨村の物語」は『紅樓夢』中の「貴族生活崩壊譚」の主題の縮図となっており、先ほどまでに考察してきました④「警幻仙姑の神仙世界」は『紅樓夢』中の男女間の「色恋」に関する場面（戒淫の主題）の発端となっております。

（資料⑱）【文字数の都合上掲載を省略いたします】

複数の導入部が並列に存在しているのです。この状況は何を意味しているのでしょうか。

*

ここで、もう一度、配布資料一枚目の(資料⑤)に掲げられた五つの書名に注目してみたいと思います。先ほども申しましたように、(資料⑤)には、『紅樓夢』の五つの書名(「石頭記」「情僧録」「紅樓夢」「風月宝鑑」「金陵十二釵」)が記されております。

それぞれの書名が想起する内容をまとめますと、(資料②⑩)のように示すことができるかと思えます。即ち、「石頭記(石の記録)」は「石に刻まれた物語」、「情僧録(情僧の記録)」は「恋愛譚」、「紅樓夢(紅^{あか}きたかどの夢)」は「貴族生活崩壊譚」、「金陵十二釵(金陵の十二美人)」は「才能ある美しい十二人の女性たちを描く」、「風月宝鑑(色恋の鏡)」は「戒淫」です。

(資料②⑩)【文字数の都合上掲載を省略いたします】

先ほど、私は「風月宝鑑(色恋の鏡)」「評が説き及ぶ」「雪芹旧有風月宝鑑」が「戒淫」を主題とした別個のミニ小説であったとの見方(「合成説」)を示しました。「風月宝鑑」が独

立した別個の小説であったならば、ここに列挙されている、それ以外の書名、すなわち「情僧録」「紅樓夢」「金陵十二釵」も、もともとそれぞれが別個の小説(以下便宜上これを「ミニ小説」と称したいと思います)であった可能性はないでしょうか。『石頭記』は「石の神話」で最終的にまとまりをつけてからの最終段階の書名と思われます。

今、見てきました現行本『紅樓夢』中に複数の導入部が並存している状況は、この『紅樓夢』成立に関する私の仮説を反映しているのではないのでしょうか。すなわち、以下のように考えることができるのではないかと思うのです。(資料21)をご覧ください。まず、男女間の「色恋」に関する場面の発端である「警幻仙姑の神仙世界」は、元来のミニ小説「風月宝鑑」において設定されていた導入部だったのではないのでしょうか。

「還淚姻縁譚」と「甄士隱と賈雨村の物語」についても、「恋愛譚」の発端である「還淚姻縁譚」は元来のミニ小説「情僧録」の導入部であり、「貴族生活崩壊譚」の縮図である「甄士隱と賈雨村の物語」は元来のミニ小説「紅樓夢」において設定されていた導入部だったのではないかと考えます。特に

「還淚姻縁譚」は、(資料⑩)に掲げましたとおり、その語り手が「僧侶」となっている点も何かしら「情僧録」の書名を示唆するものがあります。

そして「石の神話」は、各ミニ小説が集大成した際に新たに構想された設定であり、それに基づいてこの小説は最終的に「石頭記」と名づけられたものと考えます(禁書政策の厳しいこの時代にあつて、わざとこの小説がフィクションであるという点を強調するためにつけられた設定ではないか、と考えております)。

これをまとめますと、(資料21)のようにまとめることができるかと思えます。

(資料21)【文字数の都合上掲載を省略いたします】

最後に、私が想定いたします、『紅樓夢』成立の全過程を、(資料22)に示しました。

(資料22) (『紅樓夢』成立の全過程想定図)【文字数の都合上掲載を省略いたします】

少しこの【図】に関して説明を加えさせていただきます。私の「想定図」の下の★印の箇所をご覧ください。

(Ⅰ) 元来、「情僧録」「金陵十二釵」「紅樓夢」「風月宝鑑」の四書の別個のミニ小説が存在した。

(Ⅱ) その後、「情僧録」「金陵十二釵」「紅樓夢」の三書が統合され、その際に「金陵十二釵」(「大」金陵十二釵」と表記)の書名が採用される(これは資料⑤の、「曹雪芹が悼紅軒で十年間披閲し、五度増刪し、目録を編纂し、章回に分けて「金陵十二釵」と題しました」の記述に基づく想定です)

(Ⅲ) 次に「石の神話」が冒頭に設定され、書名が「石頭記」となる(別名として「紅樓夢」とも称される)。(乾隆甲戌以前)

(Ⅳ) 「風月宝鑑」の一部が挿入される

(Ⅴ) 乾隆五十六年に「紅樓夢」の書名で刊行される(「程甲本」の刊行)

*

以上、現行本『紅樓夢』冒頭の神仙世界に焦点を当てて、『紅樓夢』の成立を推測してみました。しかし、このように申しましただけでは、かなり私の推測部分が多く、やや説得力に欠けるかもしれません。『紅樓夢』は現実が細かに描かれた小説で、今回取り上げました神仙世界は、開巻の冒頭部分に出てくるのみの設定だからです。

現行本『紅樓夢』には、恋愛（恋愛譚）、貴族生活とその没落（貴族生活崩壊譚）、色恋を戒める（戒淫）、才能ある美しい女性たちを称賛をこめて描く、などの四つの主題が並列に内在しております。私はむしろ、こういった作品内部の主題を考察することで上述の仮説の証明を試みてまいりました。今日は、時間の都合上、それらにつきましては割愛させていただきます、わかりやすい一例として、『紅樓夢』に設定されている神仙世界に焦点を当てさせていただいた次第です。

三

従来、「風月宝鑑」に関してのみは、それを『紅樓夢』とは

別個の書と位置づける「二書合成論」という見方が存在することを述べましたが、私は、一書のみならず四書が合成した、との立場になります。私は、これら四書のミニ小説も元来すでに綿密な構造を持った完成度の高い小説であったと想定しております。その作者はやはり非凡な文才を持った人物、即ち曹雪芹一人と考えており、あえて別人の作者は想定していません。

最後に本日のもとめとしまして、『紅樓夢』の主題と魅力に関しても、ここで改めて考えてみます。

『紅樓夢』はいったい何を描いた小説なのか、さまざまな解釈が可能です。恋愛ともれますし、ある貴族の没落を描いたともれます。たくさんの女性たちを書きとどめたともとれます。読む人が違えば、解釈も様々です。こういった多くの読み方が可能であることの背景には、『紅樓夢』の成立過程に一つの要因があるのではないのでしょうか。『紅樓夢』は四部のミニ小説を集成した事により、「恋愛譚」（「情僧録」）、「貴族生活崩壊譚」（「紅樓夢」）、「戒淫」（「風月宝鑑」）、「才能ある美しい女性たちを描く事」（「金陵十二釵」）という四つの異なった主題を並列に含みもつ事になりました。この四

つの主題のどこに注目して読むかによつて、『紅樓夢』の見方もそれぞれ違ったものになってくるはずです。もちろんこの四つの主題とは全く異なる見方をする人もいるでしょう。しかしさまざまな解釈が可能である一因がここにあつたと考えることはできるかと思ひます。なお私は、元來のミニ小説にはそれぞれの主題が存在しましたが、それらを集大成する際の作者の主な動機は、リアリティーの追及であつたと考えております。その観点からすれば、集大成して成つた「石頭記」（すなわち現行本『紅樓夢』）の主題は、リアリティーの追求と言えましよう。その上で、『紅樓夢』はその特殊な成立過程が原因で、「恋愛譚」、「貴族生活崩壊譚」、「戒淫」、「才能ある美しい女性たちの描写」という四つの側面を併せ持つてゐるのだと考えています。

『紅樓夢』に多くの愛読者が存在する一因もまた、この成立過程から一つの説明が可能かもしれませぬ。主人公やヒロインに感情移入し、その恋愛のかけひきに魅せられ、『紅樓夢』にひきつけられた読者は、「恋愛譚」（「情僧録」）がひきつけた読者です。賈家の、庶民には想像もつかぬ豪華な貴族の生活を垣間見て、時には読者自身がその内部にいるかのごとく

感じさせられる事も『紅樓夢』の魅力の一つです。しかもそれは没落という結末をもつており、読者に深い思いを抱かせます。こういった側面から『紅樓夢』にひきつけられた読者は、「貴族生活崩壊譚」（「紅樓夢」）がひきつけた読者と言えます。また、『紅樓夢』中の王熙鳳が好き、とか誰が好き等という見方をする読者もいるでしょう。そういった読み方は、精彩な女性描写（「金陵十二釵」）がひきつけた読者と言えましよう。また、「戒淫」（「風月宝鑑」）という側面から『紅樓夢』にひきつけられた読者も存在するかもしれませぬ。また、『紅樓夢』全体のリアリティーにひきつけられる読者も存在するかもしれませぬ。こういった点は、述べてきた『紅樓夢』の成立過程と不可分のものではなく、これら複数の魅力は、その成立過程に由来すると考えられます。

ご清聴ありがとうございました。最後に、このような機会を与えてくださいました加藤国安先生に心よりお礼申しあげます。

- (1) 笹淵友一「透谷の『宿魂鏡』について」(一九五五、『文学』二十三—五)、伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行」(古田敬一編『中国文学の比較文学的研究』昭和六十一年三月汲古書院)
- 『伊藤漱平著作集 第三卷』(汲古書院) 所収) 参照。
- (2) 正宗白鳥「文壇的自叙伝」(一九三八年二月七月『中央公論』)。
『作家の自伝 五 正宗白鳥』(一九九四、日本図書センター) 所収のものを参照。
- (3) 朴承柱「島崎藤村の『春』における「懐剣」の象徴性について」(二〇〇二、『言葉と文化』) 参照。
- (4) 太田辰夫『《紅樓夢》新探—言語・作者・成立について—(I)、(II) —』(一九六五、『神戸外大論叢』一六一—三・四) 参照。
- (5) 拙著『「紅樓夢」成立の研究』第一章『「紅樓夢」成立問題研究史』参照。
- (6) 陳慶浩編著『新編石頭記脂硯齋評語輯校(増訂本)』(一九八七年、中国友誼出版公司) 所収のものを参照。
- (7) 俞平伯『紅樓夢辨』中巻「論秦可卿之死(附録)」(一九三三、亜東図書館) 他参照。
- (8) 例えば第六回護花主人(王希廉) 評に「秦氏房中、是寶玉初試

雲雨、……」等とある(馮其庸纂校訂定一九九一年文化芸術出版社『八家評批紅樓夢』所収のものを参照)。また伊藤漱平「曹霽と高鶚に関する試論」(一九五四、『北海道大学外国語外国文学研究』二、『伊藤漱平著作集 第一卷』(汲古書院) 所収) 等参照。

- (9) 伊藤漱平氏による命名。伊藤漱平「曹霽と高鶚に関する試論」(注8前掲) 他参照。

(付記)

(1) 講演当日に配布いたしました資料のうち、図や表などは、文字数の都合上ここでは掲載を省略いたしました。当日配布資料を合わせてご参照ください。

- (2) 本講演は、以下の拙稿を基にしております。

・「試論《紅樓夢》第12回在日本的早期傳播及日本文人的影响」(《紅樓夢學刊》二〇〇八一—五) 【中国語論文】

・「紅樓夢の成立 明治の文人の受容から」(二〇〇七年十二月、『アジア遊学』No.105)

・『紅樓夢』神仙世界に関する試論—警幻仙姑の訓戒を中心

にして―』(『中国学研究論集』第十二号(二〇〇三年十二月)、
拙著『「紅樓夢」成立の研究』(二〇〇五、汲古書院)第五章
所収)